

## 創業期の郵便行李



郵便創業時、郵便物の運送には、このような郵便行李が使われました。東海道の宿駅間を継立する運送担当者は各宿駅に8人程度配置され、1人で3貫目（約11キロ）の郵便行李を担ぎ、2時間に5里（約20キロ）を走りました。午後8時より午前5時の夜間は、盗賊等から郵便を保護するため、二人で走りました。輸送スピードは、東京から京都まで72時間、大阪までが78時間でした。

郵便行李の中の郵便物は、あて先別の行囊（小郵袋）に区分されていました。

宿駅には継立する駅と立寄のみの駅があり、立寄駅宛の郵便は手前の継立駅の行囊に入れてあり、手前の継立駅で継立を行う際に取り出しておきます。そして、次の立寄駅に立ち寄った際に、この宿駅宛の郵便物とそこで取集した郵便物とを交換します。取集した郵便物は、次の継立駅で区分を行い、あて先別の行囊に格納しました。

（表紙解説）

東海道五拾三次之内 吉原 東富士

松並木が続く東海道の左側に富士山が見える。道中記にも記された有名な左富士の風景である。

馬上の三人乗りは「三宝荒神」と呼ばれ、軽尻馬の鞍の前後に2本の棒を横に結び付け、左右に網をかけて鞍以外に二人分の席を設けたもので、江戸時代の街道ではよく見かける旅風俗である。

（資料紹介・表紙解説 附属資料館 井上卓朗）